

---

# 靈夢の幻想事情

澄田 康美

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

靈夢の幻想事情

### 【著者名】

Z8389Z

### 【作者名】

澄田 康美

### 【あらすじ】

あらすじ

今日も平和な幻想郷、しかし、それはあくまで平和なだけでありまして・・・

## (前書き)

### 前書き

たまには真面目に不真面目に短編小説を書いてみるとありますと判断し、むりやりつとめました。

あくまで勢いに任せてやつていいので、中身があれとか氣にしない。

見せてあげましょう！…澄田のやる氣を…！

「こ」は幻想郷。根拠は飛び交う魑魅魍魎とか猫耳とか半靈とかふん  
どしから察してくれ。

今の所、異変を解決したばかりで平和な日々、博靈の巫女にとつて  
は望ましい事らしい。

まあ異変は解決しても問題児は残る。そんな問題児達が今日も博靈  
神社に集つていぐ。

今こる面子はお馴染みの萃香と天子である。こつらは自分の家が  
あるのか少し気になる。

とりえずくつろいでいるだけなようだが、靈夢にとつてはそれす  
らうつとうしこようだ。

「あのわあ・・・あんた達は何でそんなにこに来るのよ?」

そんな問いに萃香はこんな答えを返してきた。

「だつて、こなら宴会とかたまにやるじゃん。あたしは剣とそれ  
用當てなんだよね。」

常日頃酔つている萃香らしい回答だ。

「・・・じゃあ天子、あんたは?」

「私はその・・・構つて欲しいって言つかな・・・」

さすがはどく。騒つてくれと言わんばかりにねだつてきた。

「あのね、こはあんたらみたいな暇人の相手をする場所じゃない

のよ。私は一人の方がいいの。だからさつさと帰りなぞ・・・」

と言おうとしたが、靈夢の視界に嫌な物が移り言葉を失つた。悠然と「ひちを飛んでくる魔理沙だ。

「お、今日もまた色々な奴がいるな。ここは賑やかでいいよな靈夢。

」

靈夢の心情など察する事なく、無神經な一言を言つて靈夢に挨拶した。

「・・・じゃあ、あんたがここにひどいかに連れて行つてよ。」

明らかに押し付ける気満々だ。

「やうか、でもあたしはこれから紅魔館に行くから、さすがにここにひらがいたらパチュリーが嫌がるぜ。」

言い訳臭がとてもする返事。

「あんたねえ・・・」

と言つていると、またもや誰かが飛んできた。今度はアリストだ。見た限りかなり機嫌が悪そうだ。

「あーーーにいたのね魔理沙あーー今度の今度はもひ許さないわよーーー」

魔理沙に恨みがあるらしく、上海が魔理沙目掛けてビーム的な弾幕を放つた。

「ちよま・・・」

靈夢が何かを言つ間もなく、飛んできたビームによつて土煙が舞つた。

その土煙に紛れて、魔理沙が幕で飛び去つていた。とんずらとはまさにここの事である。

「待てえい魔理沙！-！」

「あばよ〜、とつつか〜ん。」

どつかで見た事があるようなノリで、一人は神社を後にした。土煙が晴れると、今にも切れそうな靈夢が姿を現した。萃香と天子は割と気にしていない様子。

「魔理沙の奴・・・本当に厄介事しか持つてこないわね！-！」

「でも、暇つぶしかにはいいんじゃん？」

「いいなあ魔理沙・・・あんな風に構つてもらえて・・・」

相変わらずな二人、靈夢はもう限界だろ？

そんな時に、衣玖さんが空からゅつくりと降り立つてきた。もちろん？ フィーバーなポーズを取りながら。

視線を釘付けにされている内に、衣玖さんは無事着地した。ポーズを解き、視線を天子に移した。衣玖さん自体は変に笑顔だ。

「天子様・・・いつまで遊んでいれば気が済むのですか？あなたは仮にも比那名居の名を背負つていてのです。これ以上の『』無体はお

控えください。」

懇切丁寧な頼みに、天子はやはりただを捏ねた。

「ねえ、私はまだ子供なのよ衣玖？ 今ぐらい遊ばせてくれば・・・

」

と言おうとしたが口をつぐんだ。衣玖さんの笑顔から北斗並のオーラを感じ取つたからだ。

「天子様、帰りましょ~?~」

「は~・・・」

もつひとつちが上司でどつちが部下かわからない有様で、二人は空へと帰つていった。

突然すぎる出来事に、傍観とする靈夢と萃香。少しして我に帰つた二人。お互いの顔を見合わせ、靈夢はすぐに顔をそらした。

「・・・とりあえず、一人帰つていつたわね。後はあんただけど・・・」

「もうそれはいいじゃないか、靈夢。」

靈夢をなだめるように言つ萃香。

そんな所に、また誰かが来た。ここでは珍しい顔の勇儀だ。

「やつぱりここにいたね、萃香。」

用があるのは萃香の方みたいだ。

「へ？ 勇儀？ あたしに何の用？」

「ちょっとこれから地靈で鬼が集まるんだ。あんたはどうだと思ってここに来たんだよ。」

「へえ、幻想郷に鬼が集まるだなんて珍しい事だね。よし、いつちよ顔を出しましょうか。」

そう言つて靈夢に一警した後、勇儀とともに神社を後にして、気がつけば神社には靈夢しかいなくなっていた。

「ふう、やつと帰つていったわね。それじゃ私は・・・」

神社の方に戻ろうとした足が、なぜか止まつた。そして誰もいないはずの鳥居の方に振り返つた。

誰もいない状態。さつきまで確かに靈夢はこの状態を望んでいた。だがいざ来るとなるとどうやら名残惜しくなるようだ。

昔は誰一人としてここまで来る者はいなかつた。参拝に来る者すらも。仮にも人以上の力を持つた靈夢は、人々から見ればただ恐ろしい物に見えていたのだろう。

仕方がないのだ。博靈の名を背負つた時点で、靈夢はもう人とは違う者になつているのだから。

皮肉にも面倒で嫌つていた博靈の巫女としての異変解決が、靈夢に色々なつながりを作つていたのだ。

いない事の寂しさを少し噛み締めて、靈夢は神社の方に座り込んだ。ただぼーっとしていると、紫が隙間からにゅっと姿を見せた。

「あら、珍しいわね、ここにあなた以外の者が誰もいないだなんて。

からかっていののかよくわからない調子だ。

「紫・・・」

割と氣を落とした様子で、返事をした。

「靈夢、わかつたでじょひついる事とこない事の差がね。」

靈夢の心を見透かしたよつな一言を飛ばす。

「な、何の話よ?」

明らかな動搖は、その答えを隠しきれずにいた。

「ふふふ、あなた、変わったわよねえ、いいえ、あなただけじゃないわね。あなたと関わった者は全て変わつていつたわねえ。恐らくは私も含めて。でも変わつていく事はいい事だと私は思うわ。変わらない良さもあるでしょけれど、変わつていく事は自然の姿、あるべき姿なのよ。」

「何が言つたこのよ・・・紫。」

「・・・人がいいだなんて事は、思わない方がいいわよ、靈夢。」

「・・・わづね。」

靈夢の顔から、悩みや寂しさとこつた物は消えていた。憑き物が落ちたよつな感じである。

そんな様子の靈夢に、「紫が」んな提案をしてきた。

「じゃあ、今日は宴会なんぞつかしら？」

「宴会？」

靈夢は少し考えた。そして答えを出した。

「・・・じゃあ、あんたも呼びかけに協力してよな。」

「あ、それなら大丈夫。多分やつは思つたからもつやつてるわ。」

」

と言つた矢先に、文が颯爽とひきりに飛んできた。

「聞きましたよ靈夢さんー今日は類を見ない大宴会をするやつですねー？」この私も是非参加させてもらこますよーーー。」

ビシッと靈夢に敬礼をした。

軽く驚いた後、靈夢は紫に問いただした。

「うふふと紫、こぐら向でも手回し早すぎるだしちゃー。」

「いいじゃない。」つなる事は予想すみつて言つたか・・・」

と言つてこると、今度はレリコアが咲夜に日傘を差して賣つながら歩いてきた。恐らく文と同じ口であつた。

「靈夢、今日の宴会だけど、私も参加させてもらひわね。」

「ええ？ あなたも？」

「いじやな『靈夢』、これも運命なんだから。」

その言葉から、靈夢は紫のやつた手回しの呪の要因を全て理解した。

「紫……いつもわかつてたのね。」

「はて、何の事かしらねえ。」

とほける紫に、靈夢は突つかかる事もなく察した。

「まあいいわ、これから宴会の用意をしなきやね。来た奴、今からちょっと手伝つてよ。」

そう言ひて、靈夢は来た者と共に倉庫に行つて用意に取り掛かつていつた。

「ふふ、それがあなたのあるべを盗よ。博靈の巫女としてのね。」

締めくくる感じの一言を言つて紫があつた。

「あら、あなたは参加しないの？」

誰もいない所に、紫はなぜか誰かを呼びかけようと……

「とほけても駄目よ、最初からいた以上は、あなたも参加しないよ。」

・・・これはどうやら、このナレーションに向かって言つてゐるのか？

「ナリヒ。」

おこゑー、やすがは隙間妖怪だ。

「で、あなたは参加しないの？」

「そうだなあ・・・あくまでナレーションである以上、参加するこじてもこんな形のままだが？」

「それでいいのよ。どうせ作者は宴会まで書く気ないみたいだから。」

ははは、それは一本取られたな。いや、ナレーションにそんな事関係ないか。じゃあ、遠慮なく参加させてもらひつよ。

「それじゃ、早速手伝ってくれたまへ。」

ああ、そうする。

こうして、ナレーションがなぜか宴会に参加する事になつたとも。どうとせら。

(後書き)

後書き

こ・・・これはひどいですね・・・ひどすぎますね・・・

いるかもわかりませんけど、ファンの人本当すみません。

宴会はいつそ書こうつかと悩んだ末、結局割愛させていただきました。  
本当すみません。

まあ、これはやりたかっただけですので、連載の方はいつものようにしつかりやっています。あ、あつちはあつちでやりたかっただけでもありますかね・・・やっぱりすみません。

ま、ここは一つ、「ははは、こやつめ」程度の心持とか、「またやつたのか、仕方の無い奴だ」って思つてくれていれば、それが一番ありがたいのです。

所詮駄文の塊ですので、見てくれた人は本当感謝しています。

これを見た人は、もっとマシな短編もありますので、そっちの方を見る事もお勧めします。

スペシャルサンクス

博靈 靈夢 様

伊吹 萩香 様

比那名居 天使 様

霧雨 魔理沙 様

アリス・マーガトロイド 様

永江 衣玖 様

星熊 勇儀 様

八雲 紫 様

射命丸 文 様

レミリア・スカーレット 様

十六夜 咲夜 様

ナレーション 様

バクテリア 様

では、このような粗末な物をお読みいただき、真にありがとうございました。

by 澄田 康美

PS、短編は楽しいから好きです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8389n/>

---

靈夢の幻想事情

2010年10月11日10時58分発行